

東アジア共同体…「文明の生態史観」から考察する

渡辺 利夫

私は「東アジア共同体」の形成について、すでに二つの論文で警鐘を鳴らしてきた（「幻想を吹きとばす反日地政学」『中央公論』二〇〇五年六月号、「パクス・シニカにアジアが屈する日」『中央公論』二〇〇六年二月号）。そこで論じたことを思い切って要約すれば、次の三点である。

一つには、社会理念、政治体制、安全保障枠組みが相互に異なる東アジアは、共同体形成の条件を決定的に欠いていること。二つには、共同体構想の背後には中国の地域覇権主義が隠然と存在しており、共同体形成は東アジアの小国にとって危険なものになること。第三に、中国が東アジアにおいて地域覇権を掌握するに際しての障害が日米同盟であること。すなわち中国はみずからの主導により東アジア共同体を形成し、これに日本を招き入れることによって

日本の外交ベクトルを東アジアに向かわせ、そうして日米離間を謀るといなのが中国の戦略であり、それゆえ日本は東アジア共同体への参加にはよほど慎重でなければならぬこと——この三点であった。

しかし、書き終えて、もう少し深く考えてみなければならぬことが、とくに地政学的あるいは歴史学的な領域に潜んでいるのではないかという思いが残った。思い浮かんだのが梅棹忠夫氏の「文明の生態史観」である。

「文明の生態史観」は、東洋と西洋という思考に慣れ親しんできた日本の知識人に大きな驚きをもって迎えられた、一九五七年の『中央公論』二月号掲載の比較的小さな論文である。衝撃的な論文であったが、日本人の頭の中に刷り込まれてきた東洋対西洋というイメージを一新するに

はいたらなかった。だが、強い影響力を与えるのは今後ではないかという予感が私にはある。

梅棹氏の思考対象は旧世界である。南北アメリカ、オーストラリア、ニュージールランド、南アフリカという新世界は含まれない。旧世界において高度の文明化に成功したのは日本、その反対側に位置する西ヨーロッパの数カ国のみであり、これと中国、東南アジア、インド、ロシア、イスラーム諸国との間には顕著な発展格差がある。つまり前者は近代文明の恩恵に十分浴したが、後者はそうではないという。梅棹氏は前者を「第一地域」、後者を「第二地域」と名づける。

文明論的な観点から見て旧世界の最も重要な特徴は、ユーラシア大陸を東北から西南に斜めに横断する巨大な乾燥地帯の存在だという。氏はこう言う。

「乾燥地帯は悪魔の巣だ。乾燥地帯のまんなかからあらわれてくる人間の集団は、どうしてあれほどはげしい破壊力をしめすことができるのであろうか。わたしは、わたしの研究者としての経歴を、遊牧民の生態というテーマではじめただけれども、いまだにその原因についての確なことをいうことはできない。とにかく、むかしから、なんべんでも、ものすごくむちゃくちゃな連中が、この乾燥地帯からでてきて、文明の世界を嵐のようにふきぬけていった。

そのあと、文明はしばしばいやすことのむつかしい打撃をうける」。すなわち「第二地域の歴史は、だいたいに破壊と征服の歴史である。王朝は、暴力を有効に排除しえたときだけ、うまくさかえる。その場合も、いつおそいかかってくるかもしれないあたらしい暴力に対して、いつも身がまえていなければならぬ。それはおびただしい生産力の浪費ではなかったか。／たいへん単純化してしまつたようだが、第二地域の特殊性は、けつきよくこれだともう。建設と破壊のたえざるくりかえし、そこでは、一時はりつばな社会をつくることができても、その内部矛盾がたかまつてあたらしい革命的展開にいたるまでは成熟することができない。もともと、そういう条件の土地なのだった」(引用は「文明の生態史観ほか」中央公論新社、中公クラシックス、二〇〇二年、による。以下、同様)

これと対照的に、ユーラシア大陸の東端と西端に位置する第一地域は実に恵まれた地域であった。「中央アジア的暴力」はそこまでは容易に届くことはなかったからだと言う。

「つまり第一地域というところは、まんまと第二地域からの攻撃と破壊をまぬかれた温室みたいなところだ。その社会は、そのなかの箱入りだ。条件のよいところで、ぬくぬくそだって、何回か脱皮をして、今日にいたつた、とい

うのがわたしのかんがえである」

この見方を「文明の生態史観」と言うのは、生態学を用語法で文明史を観察し記述したということである。「遷移」と訳されるサクセションは、ある特定の場所に生まれた植物群落が長期間をかけて、その場所の気候条件などに適応しつつ、次第に別の群落に変化していくことを指し、新しい群落としてこれが定着した状態が「極相」（クライマックス）である。

すなわち、「第一地域」というのはちゃんとサクセションが順序よく進行した地域である。そういうところでは、歴史は、主として、共同体の内部からの力による展開として理解することができる。いわゆるオートジェニック（自成的）なサクセションである。それに対して、第二地域では、歴史はむしろ共同体外部からの力によってうごかされることがおおい。サクセションといえ、それはアロジェニック（他成的）なサクセションである」。

問題は現代である。中国の発展に見られるように、現代は第二地域の勃興期である。経済発展の速度は第一地域より第二地域のほうが速い。とはいえ、梅棹氏の指摘は鋭い。

「生活水準があがっても、国はなくならない。それぞれの共同体は、共同体として発展してゆくのであって共同体を解消するわけではない。第二地域は、もともと、巨大な

帝国とその衛星国という構成をもった地域である。帝国はつぶれたけれど、その帝国をささえていた共同体は、全部健在である。内部が充実してきた場合、それらの共同体がそれぞれ自己拡張運動をおこさないとは、だれがいえるであろうか」。

* * * * *

日本の近代を顧みれば、巨大なユーラシア大陸の中国、ロシアから朝鮮半島を伝わって吹いてくる強い気圧の等圧線からいかにして身を守るか、これが最大のテーマであり続けた。古代における白村江の戦いも元寇も、秀吉の朝鮮出兵もそのことを証す歴史的素材であるかもしれないが、そう断じる知識は私にはない。しかし、それらはいずれも対馬海峡の荒い海流に遮られて「温室」のような条件の中で育ってきた日本に生じた、ある種の偶発的な出来事であったように思われる。「中央アジア的暴力」が日本の中心部を脅かして、日本の変化を誘ったという証拠はない。

日本が恒常的に「中央アジア的暴力」と対峙させられるようになったのは、一九世紀の末葉以降のことである。「中央アジア的暴力」は必ず朝鮮半島を通じて日本に及ぶというのが、極東アジアの地政学的な構図である。実際、さきにある種の偶発的な出来事であったかもしれないと記した、日本と大陸との「有事」のいずれもが朝鮮半島を舞

台に展開されたものであった。維新後の幼弱な日本にとっての最大の焦点が朝鮮半島であった。大陸勢力と海洋勢力がせめぎ合う朝鮮半島の地政学上の位置は日本にとって宿命的であった。

清国の属領であった李氏朝鮮において農民暴動「東学党の乱」が起こるや、李朝は直ちに清国に援軍を要請、これを機に日本が出兵、日本が提出した日清共同による李朝内政改革草案を清国が拒否して日清戦争が勃発した。「定遠」「鎮遠」を擁する清国北洋艦隊に挑んで、辛くも日本はこの戦争に勝利した。日本が手にしたものが遼東半島、台湾、澎湖島であった。清国の敗北は列強による中国大陆の「蚕食」を誘った。南下政策の手を緩めないロシアにとって極東アジアの戦略的要衝遼東半島の確保は至上の戦略であり、独仏を加えた強圧的な三国干渉によって日本は遼東半島の返還を余儀なくされた。

山東省で蜂起した漢人の排外主義武力集団が北京に迫り、清国に進出していた列強八カ国の連合軍がこれに対抗するという事件(義和団事件)を奇禍として、ロシアは満州に大量兵力を投入しここを占領し居座ってしまった。満州がロシアの手に落ちたという事実はすなわち朝鮮半島において日露が直接対峙することと同義であった。

ロシアの満州での権益拡大に強い嫌悪感を抱いたのがイ

ギリスであり、ここに日英同盟が成立する。「七つの海」を支配するイギリスと同盟関係を結ぶことによって、日本は非白人国で唯一の帝国主義勢力として発展する条件を得た。日英同盟によってフランス、ドイツなどを牽制しながら日本は当時世界最大の陸軍大国ロシアに挑戦し、これに勝利した。日清、日露の両戦役は朝鮮半島の地政学が日本にとって宿命的なものであることを心底から知らしめた歴史的戦争であった。

中国、ロシアというユーラシア大陸から張り出す高気圧に対抗して日清、日露両戦役を戦った日本は、その後、第一次世界大戦の勃発によりヨーロッパ勢力が後退した中国を、対支二一カ条条約の強圧的な締結などを通じてみずからの勢力圏に組み込んだ。

しかし、この事実が同じく中国への勢力拡大を急ぐ「後発国」アメリカと日本との関係を悪化させ、一九二二年のワシントン海軍軍縮条約の締結と同時に日英同盟の廃棄をも余儀なくされた。日本はアングロサクソン勢力の支持を失って、中国というユーラシア大陸の懐の深い中心部で泥沼に足を捕られ、悲劇的な自滅への道を辿るより他なかった。

第二次世界大戦での敗北によってユーラシア大陸との断絶を強要された日本は、新たに日米同盟を結ぶことによつ

て西側社会の一員として迎えられ、そうして穏やかな「戦後六〇年」を打ち過ごすことができた。

日清、日露の両戦役は旧世界の中心部からの高圧線に抗する戦いであり、この戦いに勝利して後に中心部中国に攻め入り、協調と同盟の関係を築くべき「海の勢力」イギリスとの関係を放擲し、もう一つの巨大な海の「島」アメリカと対決して自壊した。

東アジア共同体に日本が加わって、「陸の勢力」中国と連携し、日米の距離を遠くすることは、日本の近代史の失敗を繰り返すことにならないか。私の危惧がそれである。北米、日本、台湾、東南アジアなどユーラシア大陸を取り囲む周辺国家群が「協働」し、ユーラシア大陸を牽制しながらみずからの生存と繁栄を図るという生き方が賢明な選択であることを、日本の近代史の成功と失敗は教えているのではないかと思うのである。

日本は「陸のアジア」「海のアジア」のいずれとして生きるのか、みずからの「人生行路」の分岐点について深く考えねばならない契機が、「東アジア共同体論」によって与えられたのであれば、これは一つの僥倖かもしれない。

(わたなべとしお・拓殖大学学長)